

16. 競技適応の心理

—柔道Jr.強化選手の心理的特徴と戦績との関連—

桐蔭横浜大学 吉鷹 幸春
大阪産業大学 内村 直也
摂南大学 横山 喬之
大阪心理技術研究会 船越 正康

16. The psychology of competitive adaptation: The relationship of psychological traits and performance record of enhanced Judo Jr. athletes

Yukiharu Yoshitaka (Toin University of Yokohama)
Naoya Uchimura (Osaka Sangyo University)
Takayuki Yokoyama (Setsunan University)
Masayasu Funakoshi (Osaka Society for Study of Psycho-Diagnostic Method)

Abstract

Integrated education relating to competitive improvement and the internationalization of sports from the infant stage is becoming an issue.. In judo, while national competitions are held from the elementary school level, enhanced athlete training intended for international matches has been undertaken up to now. Jr. E (jr. high)/D (high school)/C (under 19) enhanced athlete enhancement/guidance is implemented for junior high/high school/university students. In this research, together with four years' worth of psychological data (Uchida-Kraepelin psychodiagnostic test), we analyze how certified athletes improve their performance records along with growth, and whether they acquire the psychological aptitude left by Sr. (20 and above) enhanced athletes. A total of 317 certified athletes were investigated over a period of nine years, starting with the Kodokan Cup and including those who acquired Olympic medals. The results are as follows.

1. While psychological traits shown by Sr. enhanced athletes were indicated, Jr. enhanced athlete data levels were low. That is to say,
 - 1) Judo-oriented character: craftsman/master artist-like athletes made up 50%, but fell short of

Sr.

- 2) High and high-mid levels of mental sanity made up 48.5%, but low-mid and low levels showed increased tendencies at 26.8%.
 - 3) For mental energy levels, average adult levels reach 47.6%, but athletes showing high efficiency stopped at 23.6%, and stagnant (low efficiency) persons continued to increase at 29.6%.
 - 4) With athletes who are stable but have strong perseverative tendencies heading the list, athletes who are powerful but slow to start and athletes who adapt well but who lack tenacity made up almost 1/3.
2. Unrelated to psychological traits, there were more athletes who had acquired medals at major domestic and international competitions designated in university than in junior high and high school.

Subjects participated in the Olympics for the first time at the London Olympics, and the 7 medalists including 2 who have won medals at world championships since the implementation of the multiple representative system had grown from Jr. enhanced athletes. If a decrease in the level of psychological data is behind athletes becoming unable to win internationally, then the development of an enhancement program with a focus on readiness and the establishment of a coaching system which fosters a free/autonomous/independent mind is necessary for Jr. athlete training.

I. はじめに

戦後学校柔道禁止の時代から格技としての復活を経て、平成24年から中学校武道の必修化に至る過程には多くの課題が噴出していた。そもそもの復活期は他のスポーツと同一の基盤をもつ教材の位置づけであり、競技柔道としてオリンピックへの参加を実現した東京大会以降はIJF仕様のJUDOと表示した方が分かりやすい幾多の変貌を遂げた。ロンドン大会では講道館館長兼全柔連会長が日本選手団団長を務め、嘉納師範と同じようにスポーツ界に責任を持つ立場にある。そこには教育としての柔道に対する期待と並行して、競技においても世界の頂点を目指す期待がかけられている。柔道に限らず、身体活動は押並べて全人教育に貢献する基盤を持つものである。その中であって精力善用・自他共栄を掲げた師範の慧眼は、体育・教育界であって130年を経ても輝きを失わない。勝利主義至上の批判を払拭するスポーツマンの活躍と全人発達が併進すれば、期待が現実の教育成果として評価されようと云うものである。

それというのも全柔連がミュンヘンオリンピック以来コーチングに活用してきた心理テスト(内田・クレペリン精神検査(UK)法)¹⁾から見ると、競技レベルの高い選手が個性を生かし、精神的に健康な姿を示しているからである。柔道界は金メダルを獲得するのが当たり前という、宗家の矜持を堅持してきた。それはスポーツ界の勝利主義の弊害を説く教育界の思考からみれば糾弾すべきものであり、一方でオリンピックの度に柔道があってスポーツ界の意気を昂揚してきた賞賛と相反する一面を示すものでもあろう。しかUK法からみれば、個性を生かして精神的に健康な姿で輝く選手はスポーツマンの理想像を具現²⁸⁾している。さらに40年にわたるサポートデータの蓄積から、既成文化の再構築や創造に必要な心的エネルギー水準の高さを持つ選手⁶⁾が国際試合で活躍し、競技適応上好ましい意欲・勢い・粘り強さを発揮する選手¹⁴⁾が頂点に立

つ確率の高いことを証明してきた。これらはスポーツマンが求めるべき理想像を勝利達成の高みに行くほど獲得できる実証例となっている。勝利達成に真正面から立ち向かった結果としてのチャンピオンスマイルは人間教育の象徴的成果ではなからうか。

しかし現状は厳しく男子柔道は初の金メダル零を体験した。スポーツの負の効果ともいえる不祥事が起こったのも事実である。勝てば可というものではなく負けて次への成長を期する姿勢が、代表選手とともに柔道界すべてに問われているように思う。ロンドンの代表にまで成長したJr.の選手たちは、強化指定C・D・Eランクに選抜された折に心理データを残した貴重な世代である。競技力向上の視点からはJr.からの一貫教育プログラムが不可欠であり、データは現状分析に止まらず適性予測⁵⁾・個性別コーチング¹⁸⁾・事故防止⁸⁾・コンディショニング¹²⁾等に活用されてきた。本研究では選考後5-9年の間に到達した競技水準と心理特徴との関連について検証を試みる。ミュンヘンオリンピック以降に集積されたSr.のデータと比較して、競技適応の視点から若手選手の実態把握と今後の課題を明らかにしたい。

II. 方法

1. **分析対象**：Jr.強化選手の指定基準はIJFの試合規定と行事計画と連動して国内規定が変更される。平成16-19年の期間はカデ区分の定着によって大学生1・2年のJr.区分が定着してC指定となり、以下は従来通り高校生D指定・中学生E指定の3区分で毎年選考を行ってきた。この4年間の男子選手の選考はJr.強化委員会原案に基づいて審議され、Sr.と同一の体重7階級毎に最少3名-最大10名幅の中で、各年C指定40-46名・D指定37-41名・E指定32-38名が選出された。複数年にわたって選ばれる選手や一度で消える選手もいる中で、延C指定175名・D指定160名・E指定138名・計473名のデータを分析対象とする。
2. **試合記録**：国際試合選手選考の第1次予選となる全日本体重別選手権（講道館杯：K）出場の有無と試合記録を残した全選手を取り上げるとともに、全日本選抜体重別選手権：F・世界選手権：W・オリンピック：Oの1-3位記録を採用する。分析基準は、最高戦績が①代表群：O・W・F・Kの1-3位、②継続群：K5位-4回戦進出まで、③下位群：3回戦敗退以下、④不戦群とする。
3. **内田・クレバリン精神検査（UK）法による分析**：①人柄12類型および類似人柄4群、②精神健康度5分類、③心的エネルギー水準=作業量4段階、④競技適応状態=曲線傾向3分類の出現数（率）を確認した後、戦績との関連をクロス集計する。
4. **統計処理**：上記戦績①②③群3分類とUK法による4分析項目の出現比²²⁾について χ^2 -検定および臨界比（CR）を求める。有意水準は5%以下を取り上げるが、傾向推定には10%以下をも参照する。

III 結果と考察

1. 対象分類と戦績水準別該当人数

延473名のデータは317選手が残り、指定時以上の戦績すなわち講道館杯に出場できなかった選手は71名22.4%に過ぎなかった。今回の分析対象は全指定選手317名中246名77.6%であった。表1に見るようにUK検査の複数回受

表1. Jr.全受検者2群×戦績2群別分布

戦績	初回時受検				計	%
	複数回A'	%	単数回B	%		
最高OWKR1	22	40.0	25	13.1	47	19.1
講道館杯R2+R3	33	60.0	166	86.9	199	80.9
計	55	100.0	191	100.0	246	100.0

$$X^2=18.306 > 10.8^{***} \quad (p=0.01 \quad df=1)$$

検者は55名22.4%（同一人の受検初回をA'、終回をAで表す）、単数回受検者Bは191名77.6%。Jr.指定選手の8割近くがSr.指定の第1段階である講道館杯への出場権を獲得するものの、その中の8割近くが1回の指定止まりである。さらに戦績最高段階であるメダリストに成長する確率は2割弱であった。しかし単数回指定のメダリストは13.1%に対して複数回指定では4割がメダルに到達していた。Jr.がSr.レベルで活躍するためには、EDC強化選手に重ねて指定される力を示す選手が有望ということになろう。表の最下欄に記した χ^2 -値と有意水準によって法則性が確認される。以降は優位水準5%:*・1%:**・0.1%:***で比率の差に言及する。*印のないものは確率水準P値が参考となる。

2. UK分析と戦績との関連

スポーツにおけるUK法の活用は1960年代の体育学研究³⁾に始まり、1970年代にはトップアスリートの種目別曲線収集による特定個性と精神的高健康優位仮説²⁾が立証されていた。柔道界はミュンヘンオリンピックの代表選手全員の曲線¹⁶⁾を残しており、公式記録はないが既にコーチングの参考に供されていたことが明らかである。全柔連の指導体制が一新したソウルオリンピックにスポーツカウンセラーが参加した折、これまでのUKデータによるメンタル・サポートが行われた。そのときのサポート理論の根拠にUK法を適用したこと、最終日に悲願の金メダルを獲得⁴⁾したことから柔道界で長年のUK利用が定着する機縁となった。以後四半世紀にわたって上記仮説とともに国際大会における心的エネルギー水準（高能率作業量④段階）優位¹⁴⁾ ¹⁵⁾および高競技適応（上昇曲線）優位¹³⁾仮説が検証されたのも世界に冠たる日本柔道のデータ蓄積からであった。初めはコンディショニング⁷⁾を中心に国際試合選手のみが対象であったが、すぐに個性理解にも基づくコーチング利用⁹⁾ ¹⁷⁾ ²³⁾ ²⁵⁾の一法として男子Sr.に、続いて女子Sr.に行われるようになった。健康診断と同様に年1回の検査を実施するとともに、オリンピック¹⁹⁾と世界選手権²¹⁾1月前の検査が常態化した。強化委員と監督の方針によってJr.にも適用された時期があり、今回の分析対象は著者がJr.の監督を担当した4年間の男子Jr.強化指定選手たちである。この間にSr.で確認された特定個性・高精神的健康・高心的エネルギー水準・高競技適応状態がJr.ではどの程度認められるのか、単数回と複数回受検者に分けて検討する。巻末資料1および資料2に、UKデータを残した246名・301枚のUK判定結果と戦績記録の集計表を提示した。2表を基礎資料とする4項目の分析結果は以下の通りである。

1) 特定個性（人柄類型および類似人柄群）別出現率

表2. 初回受検時の人柄型別分布

人柄型	初回A'	%	初回B	%	A'+B	%
8型	34	61.8	90	47.1	124	50.4
その他	21	38.2	101	52.9	122	49.6
計	55	100.0	191	100.0	246	100.0

$$X^2=3.690 > 2.701 \text{ (} p=.10 \text{ df=1)} \text{ or } < 3.840 \text{ (} p=.05 \text{ df=1)}$$

表3. 初回受検時の類似人柄群別分布

類似人柄群	初回A'	%	初回B	%	A'+B	%
個性派IV群	36	65.5	92	48.2	128	52.0
他I-III群	19	34.5	99	51.8	118	48.0
計	55	100.0	191	100.0	246	100.0

$$X^2=5.113 > 5.024^* \text{ (} p=.025 \text{ df=1)}$$

表4. 戦績別人柄型出現率

人柄型	最高OWKR1	%	R2+R3	%	計	%
8型	31	66.0	93	47.7	124	50.4
その他	16	34.0	106	53.3	122	49.6
計	47	100.0	199	100.0	246	100.0

$$X^2=5.621 > 5.024^* \text{ (} p=.025 \text{ df=1)}$$

i. UK結果の分析：資料1の上欄・人柄類型別分布を見ると、複数回と単数回の何れにおいても8型の突出が明らかである。職人気質・名人肌¹¹⁾の資質を持つ分裂型の多さは、Sr.でも当初から確認されていた。ソウルオリンピックの代表候補15名中11名73.3%²⁷⁾に対して、表2に見る通りJr.全受検者のうち単数回受検者B群の8型は47.1%であった。4年間に2度以上受検したA'群は初回、A群は終回検査の同一人が残したものである。一度しか指定されなかったB群よりもA=A'群の競技力水準は高いと見てよい。そのA'群の8型61.8%の出現率はB群よりも高い点は適性論の見地から見て必然であるが、同時にソウルの代表候補よりも低かった。アテネオリンピック¹⁶⁾までの集計では男子代表42名中31名73.8%も同水準にあり、本対象の柔道資質保有者の該当比率は代表レベルに達していないと見るべきであろう。しかし指定基準は異なるがソウル時のCDE指定66名中19名28.8%に比べると明らかに増えており、それでいて国際大会における戦績の低調さが危惧される処である。

表3は類似人柄群2分類別分布であり、同様に8型の属するIV群が多い。ここには9.自己顕示型が含まれるものの8型が圧倒的多数を占める。9型のむら気は技志向の世界では好不調の振幅の大きさに繋がり、上位に定着できない盲点となっている。同一群ではあるが、人が真似のできない技や予期できないタイミングを身に着けて発揮するためには、8型の感性に磨きをかける指導が最適になろう。

ii. 戦績との関連：Jr.における特定個性=8型優位の法則性は戦績との関連からみても健在である。表4に見る通り、最高戦績R1に達した選手は8型：他類型=66%：34%であった。出現率が高く好成績を残す点では、これまでのSr.と遜色がない。世界選手権での金メダル獲得者もいる。ロンドンオリンピックでの優勝者0名までの過程で、過去の代表よりも出現率の低かったことが関連しているのであろうか。予測された低調さの背景理由は人柄適性論には結びつかない。個性派IV群の結果も同一だったので、ここでは省略する。

2) 精神健康度3分類別出現率

i. UK結果の分析：あらゆるスポーツで競技レベルの高い選手は精神的健康の高さ^{3) 26) 31)}を堅持している。柔道の強化選手^{5) 10)}においても同様であり、一般集団では健康度出現率の多寡は高<中>低が多いのに対して高>中>低の順になる。とくに国際試合の代表レベルではソウル大会代表候補で高度8人：中度5人：低度2人=53.4：33.3：13.3%²⁷⁾、アテネまでのオリンピック出場選手で56：6：2人=87.5：9.4：3.1%¹⁶⁾の高水準を示す。今回のJr.は表5の通り、競技水準差が想定される複数回受検者A'と単数回受検者Bの初回時出現率に差は認め

表5. 初回受検時の精神健康度分布

精神健康度	初回A'	%	初回B	%	A'+B	%
高	23	41.8	86	45.0	109	44.3
中	18	32.7	55	28.8	73	29.7
低	14	25.5	50	26.2	64	26.0
計	55	100.0	191	100.0	246	100.0

$X^2(2 \times 2) = .328 > .211$ ($p = .90$ $df = 2$) $CR(109:73) = 2.67^{**} > 2.58$ ($p = .01$)
 $X^2(A'+B) = 13.829 > 13.8^{***}$ ($p = .0001$ $df = 2$)

表6. 戦績別精神健康度分布

精神健康度	最高戦績 R1					
	初回A'	%	初回B	%	計	%
高	9	40.9	14	56.0	23	49.0
中	6	27.3	6	24.0	12	25.5
低	7	31.8	5	20.0	12	25.5
計	22	100.0	25	100.0	47	100.0

$X^2 = 1.233 > .713$ ($p = .70$ $df = 2$)

られず、高度群の総計で44.3%の
高さのみが確認された。

ii. 戦績との関連:表6に見る通り、
戦績2分類と健康度3分類比較
A' 対Bの出現率に差はなく、A'
+ Bの総計欄における高度者の出
現率は同じく44.3%であった。し
かし特定個性の出現率に見られた
ような競技レベル差は認められ

ず、Sr.での健康度優位仮説は該当しない。高競技力の健康度水準としてJr.のそれは低かつたことが一因であろう。さらに複数回受検者の初回A' と終回Aにおける最高戦績R1の健康度3分類比は表7の通り差がなく、ここでも競技力水準における高精神健康度優位仮説は認められなかった。

3) 心的エネルギー水準=作業量3段階別出現率

i. UK結果の分析:表8に作業量段階を④・A・B+Cの3区分とし、複数回中初回A' 受検者と単数回受検者Bに分けて出現率を示したが、2群間に差は認められなかった。職業適性検査²⁹⁾として出発したUK法の研究初期においても一般成人水準をA段階として捉え、義務教育終了年における通過率は50%超である。高能率水準の④段階と合わせて本対象の出現率は73.6%であるが、高校D・大学Cが多数のため安心できる率ではない。むしろオリンピック代表の圧倒的多数が④段階にある点から見れば、発達遅滞のB+C段階が多いと考えるべきである。シドニーオリンピック(2000)にミュンヘン大会以降2人目のB段階の代表が選抜された頃から、Sr.層に低作業量者が増え始めた。その背景にJr.層の発達遅滞があった。身体資質ばかりでなく心的エネルギー水準の高い選手が、他種目に流れているのであろうか。低作業量者が代表権を勝ちとる理由は、Jr.からの指導体制が整ったことと、優れた指導者を信じて指示を守り、迷いなく打ち込む姿勢が認められる。逆に見れば受動的に言われて動く範囲で国内の頂点まで達したことになる。国際試合では予測を越える試合展開があり、自立した自発的行動ができなければ頓挫しやすい。コーチ陣とは心的エネルギー水準を高める工夫をしている段階である。自然発達との区別はつかないが、表9で明らかのように複数回出場者はB+C段階が減少し、④段階が増加する。しかし金メダル最多に輝いたアテネの④段階は12名85.7%であった。ロンドン代表を含むJr.母集団の心的エネルギー水準は未だに低いと考えてよい。

ii. 戦績との関連:表8に見たようにJr.の心的エネルギー水準は複数回と単数回指定に関係なく、初回時の3段階区分間出現比に差が認められなかったが、戦績との関連では異なる側面が見られる。表10は成人水準を含む高作業量段階④+Aの戦績2分類別分布を示し、表11は低作業量B+C群について見たものである。両表ともに差が検出され、高戦績R1群は高・低両作業量ともに複数回参加者A' 群の出現比が高かった。複数回選出されたA'群の実力水準が高いので高作業量者の多い点は従来の結果と合致するが、低作業量者も同様に高戦績を残す点は矛盾していた。しかし、この現象は実態に即したものである。Sr.から国際試合が増えたと④段階の高心的エネルギー水準が要求されるのに対して、Jr.は発達途上にあり、優れた指導者の指示を信じて迷いなく打ち込み、伸びていく選手が多い。この点が反映され

表7. 最高戦績×受検機会別精神健康度

精神健康度	最高戦績 R1				計	%
	終回A'	%	初回A'	%		
高	8	36.4	9	40.9	17	38.6
中	5	22.7	6	27.3	11	25.0
低	9	40.9	7	31.8	16	36.4
計	22	100.0	22	100.0	44	100.0

$X^2 = .404 > .211$ ($p = .90$ $df = 2$)

ているのであろう。一方でJr.からSr.への移行期に伸び悩む選手^{22) 30)}の中に、大学の部活で自主・自由・自立を求められて不適応を起こす例が少なからずある。その裏返しがこのに現れたのであって、低作業量で勝てるか否かが問われている。宗家の自負として金メダル以外は目もくれない思考が柔道界には潜在しているが、国際試合で低迷する背景に心的エネルギー水準の低い選手の増したことが関係するのではなからうか。

4) 競技適応状態＝曲線傾向3分類別出現率

i. UK結果の分析：身体活動におけるUK曲線の上昇傾向²⁸⁾は運動興奮の一例として位置づけられ、健康な運動興奮は疲労感に打ち勝って頑張り続ける気力や行動の推進力と考えられている。柔道向きの個性か、高健康水準にあるか、心的エネルギー水準が高いか否かによって選手へのサポート方法を検討するとともに、意欲・勢い・頑張りを象徴する上昇傾向が認められる場合の勝率の高さ^{13) 15)}が証明されてきた。逆に下降傾向¹⁶⁾は臨機応変や適応の速さを示す一方で疲労感の強さや根気不足に繋がりが、とくに柔道では負の要因とみなされることが多かった。しかし長年の蓄積から上昇曲線でもスロースターターが問題になる例があり、平坦曲線¹⁹⁾が固執傾向や柔軟性不足による弊害を招く一方で安定性や冷静さのプラス面があることも確認されるようになった。これらの視点からJr.の状態を見たのが表12以下である。曲線傾向3分類別全Jr.の初回時曲線傾向に差はなく、上昇・平坦・下降の出現比は3等分されていた。Sr.では上昇 \geq 平坦 $>$ 下降の順で勝率に結びつき、下降の認められる選手は不調²⁰⁾な結果に終わることが多い。

ii. 戦績との関連：表13に上昇+平坦傾向・表14に下降傾向の出現比を、初回A' : Bと戦績R1 : R2+R3の2×2分割表によって示した。上昇+平坦傾向は最高戦績R1が初回A' 29.7%に対して初回B13.2%と高かった。これはSr.と同じであるが、下降傾向はA' 61.1% $>$ B

表8. 初回受検時の作業量段階別分布

作業量段階	初回A'	%	初回B	%	計	%
高能率①	7	12.7	44	23.0	51	24.5
成人水準A	29	52.7	90	47.1	119	49.1
遅滞B+C	19	34.6	57	29.9	76	26.4
	55	100.0	191	100.0	246	100.0

$$X^2=2.771 > 2.408 \quad (p=.30 \quad df=2)$$

表9. 複数回受検者の作業量段階別分布

作業量段階	終回A	%	初回A'	%	計	%
高能率①	20	36.4	7	12.7	27	24.5
成人水準A	25	45.4	29	52.7	54	49.1
遅滞B+C	10	18.2	19	34.6	29	26.4
	55	100.0	55	100.0	110	100.0

$$X^2=9.348 > 9.210^{**} \quad (p=.01 \quad df=2) \quad CR(20:7) = 2.31^* \quad (p=.05)$$

表10. 高作業量者の初回受検時×戦績分布

戦績	高作業量①+A				計	%
	初回A'	%	初回B	%		
最高OWKR1	14	38.9	20	14.9	34	20.0
講道館杯R2+R3	22	61.1	114	85.1	136	80.0
計	36	100.0	134	100.0	170	100.0

$$X^2=8.741 > 7.900^{**} \quad (p=.005 \quad df=1)$$

表11. 低作業量者の初回受検時×戦績分布

戦績	低作業量B+C				計	%
	初回A'	%	初回B	%		
最高OWKR1	8	42.1	5	8.8	13	17.1
講道館杯R2+R3	11	57.9	52	91.2	63	82.9
計	19	100.0	57	100.0	76	100.0

$$X^2=8.939 > 7.900^{**} \quad (p=.005 \quad df=1)$$

12.9%であった。ここにも作業量と同様にSr.と矛盾する結果が認められた。下降傾向が最高戦績に繋がる理由は、高心的エネルギー・高健康曲線と結びついて適応の速さが正の要因として働いたからであろう。柔道の試合時間は5分間だが、一本が宣せられれば短時間で終了する。疲労や根気不足が顔を出す前に勝ちきれば上位進出が可能である。Jr.レベルでは、その確率が高いからであろう。アテネ16)と北京19)の両オリンピックにおける成功例では、この視点からのサポートが有効であった。複数回受検者の初回A'と終回Aの上昇+平坦傾向について、表15に戦績比較を示したが差は認められなかった。

UK法を介した競技サポートは、個性理解と精神的健康・心的エネルギー水準・競技適応状態の4視点から行われてきた。ミュンヘンオリンピック以降にデータを蓄積してきた柔道では特定個性(8型 $\geq 3-1d$)と高精神的健康優位(高 \equiv 中上 $>$ 中)の確認後、一般成人以上か高エネルギーを示す心的エネルギー水準優位(作業量 $\textcircled{A} \geq A$ 段階)に加えて高競技適応状態(上昇傾向:意欲・勢い・粘り \geq 平坦傾向:

安定・冷静)優位の視点を確立してきた実績がある。これらの法則性が今回の対象であるJr.指定選手に、どのように当てはまるのか。纏めると次の通りである。

- ① 8型優位は生きている。しかしSr.の国際試合強化A・B指定選手には及ばない。
- ② 精神健康度=高+中上度群の多い集団であるが、戦績との関係は特定できない。
- ③ 高作業量= \textcircled{A} +A段階優位ながら、低作業量=B+C段階の成功率が高い。
- ④ 高競技適応=上昇+平坦曲線優位ながら、負の要因=下降曲線の成功率が高い。

Sr.との相違点は、発達過程にあるJr.の競技適応と不適応に即した実態を示すものである。8型優位とはいえ、精神健康度と戦績が結びつかない点はSr.と同一のコーチングでは成果が上がらないことの証明である。低作業量選手の成功例はJr.での指導成果であって、

表12. 初回受検時の曲線傾向別分布

曲線傾向	初回A'	%	初回B	%	計	%
上昇	19	34.5	62	32.5	81	32.9
平坦	18	32.7	67	35.1	85	34.6
下降	18	32.7	62	32.5	80	32.5
計	55	100.0	191	100.0	246	100.0

$$X^2 = .128 > .103 \quad (p = .95 \quad df = 2)$$

表13. 上昇+平坦者の初回受検時戦績分布

戦績	上昇 + 平坦				計	%
	初回A'	%	初回B	%		
最高OWKR1	11	29.7	17	13.2	28	16.9
講道館杯R2+R3	26	70.3	112	86.8	138	83.1
計	37	100.0	129	100.0	166	100.0

$$X^2 = 4.499 > 3.841^* \quad (p = .05 \quad df = 1)$$

表14. 下降傾向者の初回受検時戦績分布

戦績	下降傾向				計	%
	初回A'	%	初回B	%		
最高OWKR1	11	61.1	8	12.9	19	23.8
講道館杯R2+R3	7	38.9	54	87.1	61	76.2
計	18	100.0	62	100.0	80	100.0

$$X^2 = 15.339 > 10.8^{***} \quad (p = .001 \quad df = 1)$$

表15. 上昇・平坦傾向者の複数回受検者の戦績別分布

戦績	上昇 + 平坦				計	%
	終回A	%	初回A'	%		
最高OWKR1	18	43.9	11	29.7	29	37.2
講道館杯R2+R3	23	56.1	26	70.3	49	62.8
計	41	100.0	37	100.0	78	100.0

$$X^2 = 1.121 > 1.074 \quad (p = .30 \quad df = 1)$$

	類似人柄群					計	高 中 上 中 中 下 低					計	高 中 上 中 中 下 低					計	高 中 上 中 中 下 低					計	%
	I	II	III	IV			高	中	上	中	中		下	低	高	中	上		中	中	下	低	高		
I 協調派：すなお	2	2	3	1		8	3	4	1		8	7	9	7	3	1	27	10	13	8	3	1	35	14.2	
II 堅実派：まじめ	2	4	2	2		10	1	1	5	1	2	10	7	19	25	12	2	65	8	20	30	13	4	75	30.5
III 活動派：げんき				1		1			1		1		1	4	1	1	7	0	1	5	1	1	8	3.3	
IV 個性派：とっぴ	6	9	7	9	5	36	6	8	11	7	4	36	15	28	19	26	4	92	21	36	30	33	8	128	52.0
計	10	15	12	13	5	55	10	13	18	8	6	55	29	57	55	42	8	191	39	70	73	50	14	246	100.0
%	18.2	27.3	21.8	23.6	9.1	100.0	18.2	23.6	32.7	14.5	10.9	100.0	15.2	29.8	28.8	22.0	4.2	100.0	15.9	28.5	29.7	20.3	5.7	100.0	

作業量段階	④					計	④					計	④					計	④					計
	A	B	C	D			A	B	C	D	A		B	C	D	A	B		C	D				
計	20	25	9	1	0	55	7	29	16	3	0	55	44	90	50	7	0	191	51	119	66	10	0	246
%	36.4	45.5	16.4	1.8	0.0	100.0	12.7	52.7	29.1	5.5	0.0	100.0	23.0	47.1	26.2	3.7	0.0	100.0	20.7	48.4	26.8	4.1	0.0	100.0

曲線傾向	- - 上昇 平坦 下降					計	- - 上昇 平坦 下降					計	- - 上昇 平坦 下降					計		
	上	平	下				上	平	下				上	平	下					
計		17	24	14	55		19	18	18	55		62	67	62	191		81	85	80	246
%		30.9	43.6	25.5	100.0		34.5	32.7	32.7	100.0		32.5	35.1	32.5	100.0		32.9	34.6	32.5	100.0

*類似人柄群人柄記号： I群：1, 2, 3-2, 7 II群：3-1d, 5, 10 III群：3-1, 4, 6 IV群：8, 9
 *作業量段階： 心的エネルギー水準を表す ④：高速・高能率・高適応 A：一般成人水準 B<C<D：発達遅滞
 曲線傾向： 上昇：意欲・勢い・粘り・始動遅延 平坦：安定・着実・固執・柔軟性不足 下降：臨機・適応・意欲減退・根気不足

資料2 全日本柔道Jr.強化選手の戦績×受検機会別UK指標の変動（CDE指定：平成16～19年度） 単位：人%

精神健康度	複数回受検者										単数回受検者					初回全受検者									
	終回受検時A					初回受検時A'					初回受検時B					初回受検時A'+B									
	高	中	上	中	中	下	低	計	高	中	上	中	中	下	低	計	高	中	上	中	中	下	低	計	%
戦績																									
最高 OWR1	4	4	5	6	3	22	2	7	6	4	3	22	6	8	6	4	1	25	8	15	12	8	4	47	19.1
講道館杯R2	4	6	5	5		20	4	4	7	4	1	20	8	28	21	14	4	75	12	32	28	18	5	95	38.6
講道館杯R3	2	5	2	2	2	13	4	2	5		2	13	15	21	28	24	3	91	19	23	33	24	5	104	42.3
計	10	15	12	13	5	55	10	13	18	8	6	55	29	57	55	42	8	191	39	70	73	50	14	246	100.0
%	18.2	27.3	21.8	23.6	9.1	100.0	18.2	23.6	32.7	14.5	10.9	100.0	15.2	29.8	28.8	22.0	4.2	100.0	15.9	28.5	29.7	20.3	5.7	100.0	

類似人柄群	- I II III IV 計					- I II III IV 計					- I II III IV 計					- I II III IV 計					
	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	
最高 OWR1	1	5		16	22	1	5		16	22		5	3	17	25	1	10	3	33	47	19.1
講道館杯R2	6	4	1	9	20	6	4	1	9	20	12	25	1	37	75	18	29	2	46	95	38.6
講道館杯R3	1	1		11	13	1	1		11	13	15	35	3	38	91	16	36	3	49	104	42.3
計	8	10	1	36	55	8	10	1	36	55	27	65	7	92	191	35	75	8	128	246	100.0
%	14.5	18.2	1.8	65.5	100.0	14.5	18.2	1.8	65.5	100.0	14.1	34.0	3.7	48.2	100.0	14.2	30.5	3.3	52.0	100.0	

人柄2型分類	8型		%		計	%		8型		%		計	%		8型		%		計	%				
	8型	%	8型	%		8型	%	8型	%	8型	%		8型	%	8型	%								
最高 OWR1	14	41.2	8	38.1	22	40.0	14	41.2	8	38.1	22	40.0	17	18.9	8	7.9	25	13.1	31	25.0	16	13.1	47	19.1
講道館杯R2	9	26.5	11	52.4	20	36.4	9	26.5	11	52.4	20	36.4	36	40.0	39	38.6	75	39.3	45	36.3	50	41.0	95	38.6
講道館杯R3	11	32.4	2	9.5	13	23.6	11	32.4	2	9.5	13	23.6	37	41.1	54	53.5	91	47.6	48	38.7	56	45.9	104	42.3
計	34	100.0	21	100.0	55	100.0	34	100.0	21	100.0	55	100.0	90	100.0	101	100.0	191	100.0	124	100.0	122	100.0	246	100.0

作業量段階	④					計	④					計	④					計							
	A	B	C	D			A	B	C	D	A		B	C	D										
最高 OWR1	7	11	3	1		22	2	12	6	2		22	9	11	4	1		25	11	23	10	3		47	19.1
講道館杯R2	11	7	2			20	5	10	4	1		20	20	40	14	1		75	25	50	18	2		95	38.6
講道館杯R3	2	7	4			13		7	6			13	15	39	32	5		91	15	46	38	5		104	42.3
計	20	25	9	1	0	55	7	29	16	3	0	55	44	90	50	7	0	191	51	119	66	10	0	246	100.0
%	36.4	45.5	16.4	1.8	0.0	100.0	12.7	52.7	29.1	5.5	0.0	100.0	23.0	47.1	26.2	3.7	0.0	100.0	20.7	48.4	26.8	4.1	0.0	100.0	

曲線傾向	- - 上昇 平坦 下降					計	- - 上昇 平坦 下降					計	- - 上昇 平坦 下降					計			
	上	平	下				上	平	下				上	平	下						
最高 OWR1		8	10	4	22		5	6	11	22		6	11	8	25		11	17	19	47	19.1
講道館杯R2		6	7	7	20		7	8	5	20		22	29	24	75		29	37	29	95	38.6
講道館杯R3		3	7	3	13		7	4	2	13		34	27	30	91		41	31	32	104	42.3
計		17	24	14	55		19	18	18	55		62	67	62	191		81	85	80	246	100.0
%		30.9	43.6	25.5	100.0		34.5	32.7	32.7	100.0		32.5	35.1	32.5	100.0		32.9	34.6	32.5	100.0	

*備考 最高OWR1：オリンピック・世界選手権・福岡国際・講道館杯メダリスト *R2：講道館杯5位～4回戦敗退 *R3：講道館杯3回戦敗退～出場

参考文献

- 1) 小林晃夫：内田クレペリン精神検査法による人間の理解，東京心理技術研究会.1970
- 2) 小林晃夫：精神健康度の意義とその判定法曲線2,10-57,東京心理技術研究会.1976
- 3) 小林晃夫：スポーツマンの性格－性格からみた運動技能上達への道,杏林書院.1986
- 4) 船越正康：スポーツ選手のメンタルマネジメントに関する研究—第4報—,10-19 (財)日本体育協会スポーツ科学委員会.1988
- 5) 船越正康：適性論からみた柔道選手の特徴とオリンピック適応—特に精神的側面から—,競技種目別競技力向上に関する研究,第12報,155-159,日本オリンピック委員会スポーツ医科学委員会.1989
- 6) 船越正康：柔道選手の競技適応—国際試合を中心に—競技種目別競技力向上に関する研究II,114-122,日本オリンピック委員会スポーツ医・科学委員会.1991
- 7) 船越正康：柔道選手の競技適応—国際試合を中心に,競技種目別競技力向上に関する研究,II-16-4,62-69,日本オリンピック委員会スポーツ医・科学委員会.1992
- 8) 船越正康：柔道におけるケガの予防と対策⑩、講道館「柔道」63(2):39-42.1992.8
- 9) 船越正康：競技柔道における臨床的思考の適用—UK法による人間理解を中心に—,1-9,競技力向上研究1-1,関西競技力向上研究会.1993
- 10) 船越正康：柔道選手の競技適応—ハミルトン世界選手権大会を中心に,競技種目別競技力向上に関する研究,第17報,114-122,日本オリンピック委員会スポーツ医科学委員会.1994
- 11) 船越正康：国際試合に臨む柔道選手のメンタルサポート,大阪の柔道,20:7-11,大阪府柔道連盟.1997
- 12) 船越正康：選手とコーチのためのメンタルマネジメント,実践プログラム柔道,2(3):212-243,大修館.1997.7
- 13) 船越正康：UK法の曲線理論に基づく柔道の勝敗予測—全日本ジュニア強化選手対フランス・ナショナルチーム戦から,全日本柔道連盟国際試合選手強化委員会科学研究部,柔道科学研究6.2000
- 14) 船越正康：競技適応の心理—UK法による勝敗予測指標の検討,69-79,講道館科学研究会紀要.2002
- 15) 船越正康：UK法から見た競技適応研究—全日本女子柔道体重別選手権出場選手のデータ分析から,柔道,74(1):90-96.2003
- 16) 船越正康：アテネオリンピックのメンタルサポート—日本代表選手のUK分析から—,講道館柔道科学研究会紀要,143-157.2005
- 17) 船越正康：個性別競技適応行動の研究—感受性の繊細な柔道チャンピオンの事例～自己記載と再検証,講道館科学研究会紀要,173-187.2007
- 18) 船越正康：柔道コーチング論,V人間理解に基づくコーチング,193-211,柔道選手育成研究会,道和書院.2008
- 19) 船越正康：Analysis of victory or defeat cause of Japanese judo team in Beijing Olympic p8 2008 International Judo Symposium on Sports Medicine and Science 2008
- 20) 船越正康：メンタルトレーニング研究の課題,スポーツ心理学研究27(1):39-49,日本スポーツ心理学会,第一法規.2000.9
- 21) 船越正康：Results of participation players in a World Judo Championships 2010 Tokyo and

- the analysis by UK method—Regarding the representative of Japan.2011 International Judo Symposium—Medical and Scientific Aspect.10-11.2011
- 22) 岩原信九郎：教育と心理のための推計学,166-175,日本文化科学社.1991
 - 23) 金野 潤：個性別競技適応行動の研究—感受性の繊細な柔道チャンピオンの事例～自己記載と再検証,講道館科学研究会紀要11,173-187.2007
 - 24) 松本純一郎：Sr.と比較したJr.柔道強化選手の精神特徴—全国中学校柔道大会優勝校に関する事例研究,大阪武道学研究,17(1):11-21.2000
 - 25) 榎崎教子：個性別競技適応行動に関する研究—慎重な女子柔道世界チャンピオンの事例,講道館科学研究会紀要12,183-196.2009
 - 26) 角 保宏：アメリカンフットボールにおけるクォーターバック（QB）の精神適性について,曲線型7,38-46,東京心理技術研究会.1983
 - 27) 高橋邦郎：適性論からみた柔道選手の特徴とオリンピック適応—特に精神的側から,スポーツ医・科学研究報告,II-12-9,155-159,日本体育協会.1988
 - 28) 辻野 昭：体育科教育の理論と展開,身体活動と心のはたらき,1-4,46-66.1980
 - 29) 内田勇三郎：新適性検査法—内田クレペリン精神検査法,16-50,日刊工業新聞社.1957
 - 30) 渡辺涼子：柔道強化選手と比較した大学柔道選手の精神的特徴,講道館科学研究会紀要12,197-204.2009
 - 31) 山口文子：日本泳法大会泳法競技入賞者のパーソナリティに関する一考察,曲線型3,101-10,東京心理技術研究会.1977